



村小だより

平成31年2月14日発行

「引継ぎ、つなぐ」、地域・学校で

校長 鈴木 正美

「初午」(2/2)、「節分」(2/3)、「立春」(2/4)と季節の節目も過ぎ、暦の上では春を迎えましたが、まだまだ寒さ厳しい日々が続くこの頃です。とは言え、日も長くなり、少しずつではありますが、「春」を感じ始める時節でもあります。

現在、学校の児童玄関脇の水槽では、村上東中2年生が受精させた鮭の発眼卵(12月に引き継いだもの)がふ化し、かなり動き回るくらいの元気な稚魚に成長しています。放流までの間、さらに大きく、たくましくなるよう4年生が育てます。登校すると毎日稚魚の様子を見て「がんばって、大きくなってね」等、声をかける低学年の子どもたちも見られます。

また、地域では今年も関係する10町内(学区)で、子どもたちが引き継ぐ初午行事「御利生(ごりしよ)」が行われました(月遅れで行う町内もあるそうですが)。そのやり方は、家内安全や商売繁盛を願い、町内を太鼓を叩いてふれ回り、狐に扮した子どもたちが家々で踊りを踊ったり、御札を配ったりと各町内で様々あるようです。いくつかの町内の様子を垣間見ましたが、大人の手を借りながらも、自分の役目を一生懸命果たす様子が見られ、嬉しく思いました。

さて、学校では「6年生へ感謝の気持ちを伝えよう」と次期リーダーとなる5年生の企画による全校での様々な活動が始まっています。そして、そのフィナーレである「6年生を送る会」を成功させるべく、各学年や職員も準備を進めているところです。

こうして学校では、子どもたちは「感謝と引き継ぎ」、職員は、次につなぐための「まとめ」と「計画づくり」に本格的に入っていきます。年度の締め切りの時期、変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

<2019わが家の節分(豆まき)>

今年も豆まきは私が行いました。夕方気が付くと、既に神棚には御灯がとまり、升に入った豆が上がっていました。この準備は母の仕事で、焙烙(ほうろく)で煎った大豆を使います。「正美、豆まきしてくれしや」の声。細長い町家の表玄関から裏口までの部屋・台所・廊下・風呂・トイレ・土蔵・小屋等あらゆる所に、「鬼は外、福は内」と言いながら豆をまきます。母は、脇で「ごもつとも、ごもつとも」と口ずさみます。

豆まきが終わると、家族の数え年と同数の豆を一人一人の名前が書かれた小袋に分けます。わが家では病気にならないように、自分の分は「食べる」、もしくは「お守りとして持つ」ことになっていて、私は堅い豆をボリボリとその日のうちに完食しました。市外、県外にいる家族には機会をみて郵送されます。また、今年はやめました。家族の数え年と同数の豆をもう1セット数えて袋詰めし、そこに小銭を入れて街角に置いてくる「厄落とし」も去年までは続けていました。

この日曜日、地域の新聞にあった「肴町で行われた地元商工会主催の『昔ながらの豆まき』」の記事を見て、密かに思いました。何となく続けているわが家の豆まきも、「昔ながらの風習で行う豆まき」の部類に入るのかな・・・？と。皆様のお宅ではどんな節分(豆まき)が行われているのでしょうか。

